

平成 29 年 5 月 15 日現在

機関番号：30107

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26770036

研究課題名(和文) ユダヤ・ルネサンスにおけるニーチェ受容と自由ユダヤ学院の思想史的研究

研究課題名(英文) The Relationship between the Acceptance of Nietzsche's Thought and the Free Jewish House of Study in the Jewish Renaissance: from the Perspective of Intellectual History

研究代表者

佐藤 貴史 (SATO, TAKASHI)

北海学園大学・人文学部・准教授

研究者番号：70445138

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、20世紀ドイツにおけるユダヤ・ルネサンスをニーチェ思想の受容と自由ユダヤ学院の政治・教育的機能という2つの観点から考察した。第1の観点に関しては、ニーチェの近代批判が多くのユダヤ人思想家、とくにマルティン・ブーバーの思想に大きな影響を与えていたことを解明した。第2の観点に関しては、自由ユダヤ学院は19世紀のユダヤ学の成立と関係づけながら考察する必要性があることが明らかになった。この2つの結果を通して、本研究はドイツにおける近代ユダヤ教の複雑な展開を考察するための有益な手がかりを示すことができた。

研究成果の概要(英文)：This study considered the Jewish Renaissance in Germany in the twentieth century from two perspectives: acceptance of Nietzsche's thought and the political-educational function of the Free Jewish House of Study (Freies Juedisches Lehrhaus). Regarding the first aspect, we clarified that Nietzsche's modern criticism had a great influence on many Jewish thinkers, the ideas of Martin Buber in particular. Regarding the second aspect, it became clear that there is a need to consider the Free Jewish House of Study in relation to the formation of Jewish Studies (Wissenschaft des Judentums) in the nineteenth century. Through these two results, this study could provide useful clues to elucidate the complex development of modern Judaism in Germany.

研究分野：思想史・宗教学

キーワード：フランツ・ローゼンツヴァイク マルティン・ブーバー レオ・シュトラウス ニーチェ 自由ユダヤ学院 ユダヤ・ルネサンス ユダヤ学 歴史主義

1. 研究開始当初の背景

これまで研究代表者は、ローゼンツヴァイクの「新しい思考」を「歴史主義」(価値のアンサー)の問題と絡めて研究してきた。さらに歴史主義のコンテクストの下でローゼンツヴァイクと初期シュトラウスを比較検討した結果(2008~2009年度若手研究(B)「近代ユダヤ思想史と歴史主義の問題—ローゼンツヴァイクとシュトラウスの比較研究—」およびその後の研究)次の3点が明らかになり、それは本研究の「学術的背景」となっている。

第1に、プーバーの論文「ユダヤ・ルネサンス」(1901)は、20世紀のドイツ・ユダヤ思想史における記念碑的な位置を占めているが、わが国では本格的な議論がまだなされていない。従来、プーバーの思想は『我と汝』に代表される普遍的な人格主義の哲学として論じられてきたが、若きプーバーの思想におけるユダヤ教の刷新運動の支持や19世紀のユダヤ学への批判は、当時のコンテクストを考慮しなければ適切に理解できないのである。

第2に、ユダヤ・ルネサンスの中心問題の一つは「学問と生」の対立であり、これは当時の若きユダヤ人思想家にとって「ユダヤ学とユダヤ的実存」の緊張関係、あるいは「ユダヤ教・ユダヤ民族の歴史(学)的解釈と非歴史(反歴史)的解釈」の対立として受け取られた。「学問と生」の対立はマックス・ヴェーバーの『職業としての学問』の重大テーマであり、若きユダヤ人思想家もまたドイツ人思想家と同様の問題に直面していたこと(=コンテクストの共有)が判明した。

第3に、このようなドイツ・ユダヤ人のディレンマを救うために召喚されたのがニーチェの生と意志の哲学、反歴史の思想であり、そこには超人概念とメシアニズムの融合という両者の「奇妙な同盟」があった。20世紀初頭の若きユダヤ人思想家は、ニーチェの強い影響下で19世紀ヨーロッパの古典的教養や微温的リベラリズムを破壊しようとしたのである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、第1にコンテクストとして20世紀ドイツにおけるユダヤ・ルネサンスを、またテキスト分析=問題設定としてユダヤ人思想家によるニーチェ思想の受容に焦点を合わせ、結果的にユダヤ・ルネサンスがどれだけ「非ユダヤ的なもの」に束縛されていたかを明らかにすることである。

第2に、従来ローゼンツヴァイクの「自由ユダヤ学院」は、彼の人生における美しいエピソードとして扱われてきたが、それでは不十分である。学院はユダヤ人思想家の緊密な「ユダヤ的知のネットワーク」であり、近代ユダヤ人の再生を目指した彼の政治的行為

であったことを解明する。

3. 研究の方法

本研究は、ローゼンツヴァイクとプーバーの主著や雑誌論文のうち彼らの独特なニーチェ解釈を読み込んでいく思想史的な文献研究を方法とする。また思想家個人のテキスト分析だけでなく、彼らが創設・運営をした自由ユダヤ学院におけるニーチェ化されたユダヤ教の教育状況など組織的な側面(学院の政治-教育的機能、メンバー、カリキュラム)からも分析することで、ユダヤ・ルネサンスへの複合的なアプローチを行う。言い換えれば、近代ユダヤ人における世俗化と生の喪失の社会史的背景、個別の思想家と組織の相互関係を踏まえながら、従来の「対話の哲学」という視点では捉えきれないユダヤ・ルネサンスの思想史をまとめる。

4. 研究成果

(1) 2014年度

2014年10月にフランクフルト大学で開催された国際ローゼンツヴァイク学会(Internationale Rosenzweig-Gesellschaft)において「フランツ・ローゼンツヴァイクの教育プログラムと政治」(Franz Rosenzweigs Bildungsprogramm und Politik)という題で研究発表を行った。学会の共通テーマがローゼンツヴァイクの自由ユダヤ学院や教育観に関わるものであり、本研究とも密接に関連する内容だという理由で、当初予定になかった研究発表をすることになった。結果的に、発表に対してわが国では得ることが難しい有益な意見をもらうことができ、また他の研究者の発表も、本研究にとってきわめて重要な視点を提供するものだった。

反省的に発表成果について述べれば、「政治的なもの」「非政治的なもの」「反政治的なもの」といった諸概念の区別を明確にすることが、自由ユダヤ学院でのローゼンツヴァイクの活動や彼の「新しい思考」と政治の関係を考えるうえで必要不可欠な前提作業であることがわかった。すぐに明確な答えを出すことはできなかったが、このような指摘は近代ドイツにおけるユダヤ人の思想はきわめて複雑な政治概念との関連で形成されていることの一つの証左だったと判断できるだろう。

2014年度はしばらく中断を余儀なくされていた単著の執筆が進み、その途上で多くの知見を得ることができた。とくにユダヤ・ルネサンスにおけるニーチェ受容に関しては、プーバーの思想研究を通してかなりの程度進んだことが特筆すべき成果であった。

プーバーのユダヤ・ルネサンス論で注目すべき点は、それが単なる「回帰」ではなく、「太古のマテリアルからの新たな創造」を意味したことにある。すなわち、プーバーは「太

古の「マテリアル」に拠り所を求めているという意味では、ユダヤ的伝統を「復興」させ「復活」させようとしているが、その伝統を近代ユダヤ人の生にふさわしいものとして新たに創造しようとしている。彼の試みは「太古のマテリアル」との断絶でも、そこへの単なる回帰でもないといえる。

「回帰」という、ある意味でありふれた近代批判の方法をしりぞけたブーバーが選んだのは、「太古のマテリアル」を通じての近代世界にふさわしい 伝統の新たな創出 であり、ここに近代によって生み出された問題を近代のなかで克服しようとするブーバーの屈折した近代批判、あるいはユダヤ文化の進歩的回帰を読み取ることができる。

申請の段階ではまだはっきりしなかったが、ユダヤ・ルネサンス、ローゼンツヴァイクの自由ユダヤ学院、ブーバーの思想などを理解するうえで欠かせないのは 19 世紀に成立したユダヤ学の正確な理解だという知見も得ることができた。ただまずは 20 世紀の研究を重点的に行うために、2014 年度は関連する英語論文 (David N. Myers “The Ideology of Wissenschaft des Judentums”) を翻訳した。マイアーズの論文は 19 世紀から 20 世紀にかけてのドイツ・ユダヤ思想を学問史的に考察したものであり、本研究の視野を拡大するうえで重要な働きをしたことを付け加えておきたい。

次年度の研究で中心的に考察されたレオ・シュトラウスの思想を 2 つの場で論じることができた。第 1 に、彼のシオニズム理解をフロイトとの関係で扱い、フロイトの宗教批判とシュトラウスのシオニズム批判が重要な点で交差していることを論文としてまとめた。第 2 に、亡命先のアメリカで書かれた名著『自然権と歴史』にはヴァイマル時代の歴史主義の問題が暗い影を落としているのではないかという仮説を立て、その内容について政治哲学研究会で発表した。ローゼンツヴァイクやブーバーよりも若い世代に属するシュトラウスが、2 人の偉大なユダヤ人思想家や当時のユダヤ・ルネサンスから大きな影響を受けていることが垣間見れたことは大きな成果だった。

(2) 2015 年度

20 世紀を中心としながらも、近代ドイツに成立したユダヤ学やそれに関わる諸組織、近代ユダヤ人のアイデンティティ問題や学問理解について研究した。

2015 年度は、前年度に大幅に執筆が進んだ単著『ドイツ・ユダヤ思想の光芒』(岩波書店)を出版した。そのなかでは前年度に引き続きブーバーの近代批判、ローゼンツヴァイクの自由ユダヤ学院とシュトラウスの関係を扱っただけではなく、ゲルショム・ショーレムのユダヤ青年運動批判、ディアスポラのユダヤ人とシオニズムをめぐるヘルマン・コーエンとブーバーの誌上論争、ユリウス・グ

ットマンの宗教哲学、シュトラウスによるグットマン批判なども論じることができた。

本研究との関連でいえば、とくに自由ユダヤ学院を「ユダヤ的知のネットワーク」と特徴づけ、そのなかで多くのユダヤ人思想家がそれぞれの仕方近代世界におけるユダヤ人のアイデンティティ喪失の危機を憂い、その窮状からユダヤ人を教育によって救済しようとする試みが多々なされていたことがわかった。

また、自由ユダヤ学院よりも前の時代になるが、やはりユダヤ的知の復興を目指して設立されたユダヤ学促進協会の機能について宗教学会で発表した。ユダヤ学促進協会は「自己保存の義務」「われわれの宗教に対する聖なる義務」、そして「学問や普遍的文化に対する義務」という 3 つの義務をあげているが、これは学問研究 とくにユダヤ教の歴史批判的研究 に限定されない、協会の非常に複雑な性格を反映していることがわかる。

上記 2 つの組織を考えてみても、ユダヤ学と組織(制度)の関係のなかには、錯綜した活動と性格を確認することができる。たとえば 19 世紀のユダヤ学によるユダヤ教の歴史化のなかで、反ユダヤ主義への弁証学的応答や大学でのポストの要求だけでなく、学問の聖性を強調するような「学問の神聖化」が反動的に起こったともいえる側面がある。そこで確認できるのは、ユダヤ教の歴史批判的研究というユダヤ学の理念とも密接に関連した現象、すなわちユダヤ教を世俗的に研究することの過剰な負担によって生み出された緊張状態や学問の変容である。それゆえ、少なくとも 19 世紀から 20 世紀にかけてのドイツ・ユダヤ思想やユダヤ教研究の歴史は、このような視点を含めて考察されなければならないだろう。

こうしたユダヤ教の変化は近代世界の動向と密接な関係にあることは自明である。直接的にユダヤ教を論じたわけではないが、ウルリッヒ・ベックの近代化論やユルゲン・ハーバーマスのポスト世俗化論を参照しながら、「反省的/再帰的近代化」する世界のなかでの宗教の位置についても考察した。つねに反省を強いられると同時に、その結果が何を引き起こすかわからない近代社会では、宗教もまた変容せざるをえないのであり、近代ユダヤ教もベックやハーバーマスの議論を下敷きにして解釈することができるのではないかという具体的な感触を得ることができた。

(3) 2016 年度と総括

最終年度であるため、ユダヤ・ルネサンスの思想史を総合的にまとめる視点と、20 世紀のドイツ・ユダヤ思想を生み出すことになった 19 世紀のユダヤ学の成立状況を有機的に結びつけながら研究するように心がけた。

京都ユダヤ思想学会ではヨセフ・ハイ-

ム・イェルシャルミのユダヤ的記憶論とユダヤ学批判、宗教学会ではブーバーやイスマール・エルボーゲンのユダヤ学理解を取り上げ、20世紀ユダヤ人によるニーチェ思想の特異な受容と自由ユダヤ学院の設立の背景には、歴史批判的な学問観に基づいたユダヤ学に対する強烈な嫌悪感があったことを確認できた。しかし、同時にエルボーゲンのテキストを読むと、当時のキリスト教社会やドイツ・アカデミズムに対してユダヤ教の世界史的・学問的意義をどのように伝えるべきかという問題に関して多くの苦悩があったこともわかる。このように19世紀と20世紀のドイツ・ユダヤ思想の間には愛憎半ばする複雑な関係があり、それを読み解くためには近代世界、ユダヤ教、ドイツ・アカデミズムという巨大な問題圏をつねに意識しながら研究しなければいけないだろう。

以上、3年にわたる研究成果について述べてきたが、結果的にその内容は次の4点にまとめて総括することができる。

第1に、ブーバーに代表されるような20世紀のドイツ・ユダヤ人の目からみて、啓蒙と歴史主義を生み出した近代は伝統的なユダヤ教にとって大きな脅威であった。そのような危機の時代において、ニーチェの思想はユダヤ教のなかに生き活きとしたものを発見するうえでの重要な解釈的視点を提供してくれたのである。

第2に、ローゼンツヴァイクの自由ユダヤ学院は、ほとんどユダヤ教なのかどうかもわからないような講義も含めて、成人ユダヤ人のアイデンティティの危機を教育によって救済しようとした20世紀ドイツにおける記念碑的なユダヤ人組織だったといえる。しかし、そこではシュトラウスを中心とした学院の路線対立もあり、近代世界のなかでユダヤ教を復興することの難しさを窺うことができる。

第3に、ユダヤ・ルネサンスはきわめて両義的な現象だったと判断することができる。あらゆる価値が反省の対象となる近代世界のなかで、ユダヤ教も例外ではなく、多くの批判にさらされた。その窮状を克服する一つの手段が自由ユダヤ学院の創設であり、そこには近代批判の契機があった。他方で、ユダヤ・ルネサンスは19世紀のユダヤ学によって歴史化されたユダヤ教を、ニーチェを経由しながら刷新しようとした一種の改革運動であり、近代批判に根差した単なる宗教回帰ともいえない側面がある。その意味では、近代/近代批判、あるいは世俗/宗教という二元論では整理できない複雑な現象であることがわかる。

第4に、これまでの3つの点は広くみれば近代世界の成立と密接な関係にあり、限定的にみれば19世紀のユダヤ学に対する直接的・間接的応答である。それゆえ、次の早急の課題として学問史的視点から19世紀ドイツ・ユダヤ思想史を考察する必要性が浮上し

てくるのであり、これによってユダヤ・ルネサンスの思想史を近代ドイツ・ユダヤ思想史のなかに組み込む有益な視点を獲得できるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

佐藤貴史「問いとしての余白 拙著『ドイツ・ユダヤ思想の光芒』をめぐって」、『北海学園大学人文論集』、査読無、第62号、2017年、139-154頁
<http://hokuga.hgu.jp/dspace/handle/123456789/3251>

佐藤貴史「世界史の内部と外部——フランツ・ローゼンツヴァイク『ヘーゲルと国家』(村岡晋一・橋本由美子訳、作品社、2015年)を読む」、『政治哲学』(政治哲学研究会)、査読無、第20号、2016年、124-133頁

佐藤貴史「反省的/再帰的近代化と宗教」、『北海学園大学人文論集』、査読無、第60号、2016年、93-120頁
<http://hokuga.hgu.jp/dspace/handle/123456789/3047>

佐藤貴史 訳、ナータン・ローテンシュトライヒ「『伝統と現実 近代ユダヤ思想に対する歴史の衝撃』(翻訳1)」、『学園論集』、査読無、第164・165合併号、2015年、25-36頁
<http://hokuga.hgu.jp/dspace/handle/123456789/2949>

佐藤貴史 訳、デイビッド・N・マイアーズ「ユダヤ教学のイデオロギー」、『北海学園大学人文論集』、査読無、第58号、2015、95-119頁
<http://hokuga.hgu.jp/dspace/handle/123456789/2769>

[学会発表](計9件)

佐藤貴史「シュトラウスとシュミット」、『政治哲学研究会』、2017年3月5日、お茶の水女子大学(東京都・文京区)

佐藤貴史「コメント」、『北海学園大学人文学会』、2016年11月12日、北海学園大学(北海道・札幌市)

佐藤貴史「ドイツ・ユダヤ思想史の余白」、『広島比較文化研究会』、2016年11月6日、広島県合人社ウエンディひと・まちプラザ(広島県・広島市)

佐藤貴史「ユダヤ教研究における「学問」

と「生」』、日本宗教学会、2016年9月11日、早稲田大学（東京都・新宿区）

佐藤貴史「イエルシャルミ試論」、京都ユダヤ思想学会、2016年6月19日、同志社大学（京都府・京都市）

佐藤貴史「宗教について 文化を学ぶ、世界と繋がる」、北海学園大学人文学会、2015年11月14日、北海学園大学（北海道・札幌市）

佐藤貴史「ドイツにおけるユダヤ教研究と制度」、日本宗教学会、2015年9月6日、創価大学（東京都・八王子市）

Takashi Sato, “Franz Rosenzweigs Bildungsprogramm und Politik”, Internationale Rosenzweig-Gesellschaft e.V. (IRG), 28. Oktober 2014, Frankfurt am Main (Deutschland)

佐藤貴史「*Natural Right and History*における「歴史主義」と「経験」の問題」、政治哲学研究会、2014年9月9日、北海道大学（北海道・札幌市）

〔図書〕（計3件）

佐藤貴史、岩波書店、『ドイツ・ユダヤ思想の光芒』、2015年、278頁

佐藤貴史 他、小樽商科大学出版会、西永亮〔編〕『シュトラウス政治哲学に向かって』、2015年、19-39頁

佐藤貴史 他 訳、教文館、フリードリヒ・ヴィルヘルム・グラフ〔編〕・安酸敏眞〔監訳〕『キリスト教の主要神学者 下 リシャルド・シモンからカール・ラーナーまで』、2014年、151-172、237-276頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 貴史 (SATO TAKASHI)
北海学園大学・人文学部・准教授
研究者番号：70445138